



田舎の義母と僕

—村の神事は淫靡な香り—

芳川葵

挿絵／阿川椋

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

第一幕	巫女と人妻	淫らな神事指導	4
幕間	其の壺	37
第二幕	義母の艶姿・熟女の淫ら姿	40
第三幕	神事 奉納セックス	106
幕間	其の式	168
第四幕	禁断の姫はじめ	172
第五幕	3人天女と夢はじめ	223

登場人物

Characters

高島 沙優李

(たかはた さゆり)

村の儀式を取り仕切る高島家の家長。夫に先立たれ、子供にも恵まなかったため、後継ぎとして甥の正哉を養子にむかえた。清楚で優しい大和撫子のようなしっとりとした色気を持っている。

鶴岡 美咲

(つるおか みさき)

土産神社の神主の娘で巫女を務める。正哉とは幼少期からの知り合い。勝ち気で素直になれない性格で、憎からず思っている正哉をからかったり、こきつかったりする。

保坂 敬子

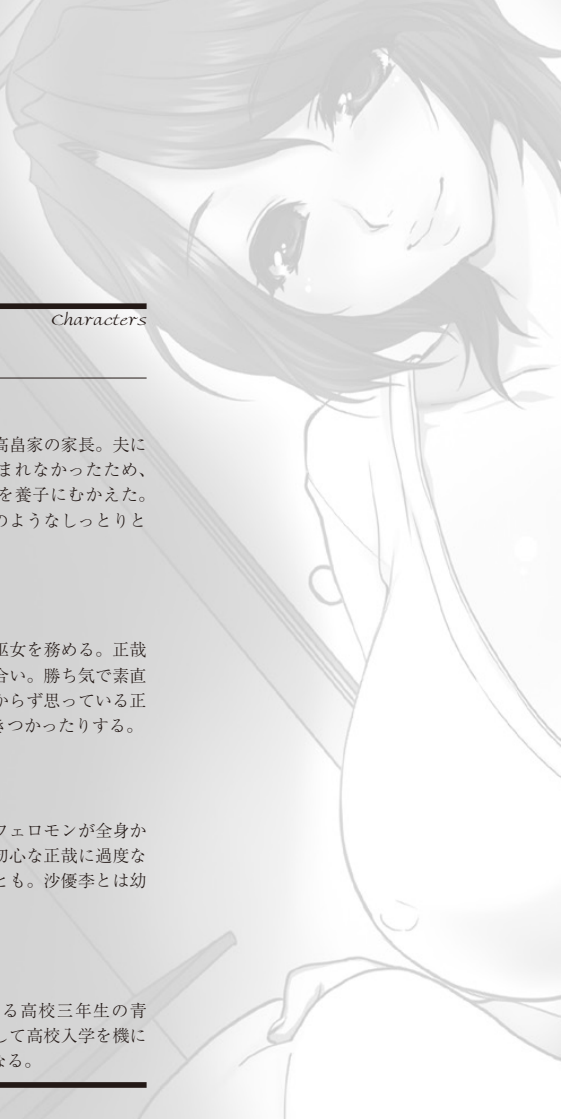
(ほさか けいこ)

美涌谷村の村長の妻。フェロモンが全身から漂う妖艶な熟女で、初心的な正哉に過度なスキンシップをすることも。沙優李とは幼馴染みの関係。

高島 正哉

(たかはた まさや)

真面目で思いやりがある高校三年生の青年。高島家の後継ぎとして高校入学を機に叔母の沙優李の養子となる。



「うふふつ、可愛いのね。でも、沙優李は私以上に胸、大きいわよ」
「へっ？」

突然、沙優李の、義母となった叔母の名前を出され、正哉は怪訝な表情を浮かべた。それまで順調に迫りあがってきていた射精欲求が、若干後退していく。

「正哉、分かっているでしょうけど、三十日に沙優李さんの姿を見て、こんなふうにするんじゃないわよ」

「な、なに言ってるんだよ、美咲姉ちゃんまで。なるわけないだろう。叔ばッ、いや、義母^{かあ}さんなんだから」

いったん手淫の手を休めた美咲までもが沙優李に言及したことに、正哉の驚きはさらに大きくなっていった。

確かに義母は、「鄙^{ひな}には稀な」という形容詞がつきそうな美貌を誇っている。うりざね顔の輪郭に、それぞれが整ったパーツが見事なバランスで配置されているのだ。

だが、離れて暮らしていた期間が長いこともあり、たまにしか会うことのなかった沙優李に「おんな」を感じたことは一度もなかった。子供の頃は、遊びにきたときに一緒にお風呂にも入っていたが、いまではその裸を思い出すこともできない。

性欲の対象として見ていたのは、初恋相手の美咲や、学校の同級生や先輩であって、

沙優李については母親以上の感情を持っていなかったのだ。それだけに、二人の言葉には戸惑いすら覚えてしまう。

「あら、沙優李のこと、全然意識してないの？」

正哉の右手に自らの右手を重ね合わせ、たっぷりとした膨らみを揉みこませながら、敬子がさも意外そうな声をあげた。

「は、はい。あの、敬子さんは義母さんのこと、よく知っているんですか？」

ニットとブラジャー、二枚の生地が間にあるとはいえ、初めて触る乳房の感触に陶然としつつ、正哉はこっくりと頷いていた。ついでに、義母を呼び捨てにしていたとさきを感じた疑問を口にする。

もちろん狭い村の住人同士、顔くらいは知っているかもしれない。だが、敬子の言葉には、それ以上の親しみがこめられているように感じられたのだ。

「知らなかったの？ 私と沙優李は幼なじみなの。正哉君と美咲ちゃんの関係と同じよ。私のほうが二つお姉さんなんだけどね。それと私、小学生の正哉君にも何度か会ってるのよ、覚えてないみたいだけど」

「えっ、そうだったんですか。すみません、覚えてませんでした」

敬子の予想外の言葉に、正哉は驚きの声をあげた。毎年、夏は村ですごしていたの

だが、敬子と会ったという記憶がどうにも見つからなかったのだ。

「いいのよ、そんなこと。ところで、どう、美咲ちゃんにチマチマこすられてても、全然イケないでしょう？ このまま私の家に来る？ そうすれば……」

「けっ、敬子さん、いい加減にしてください。人妻なんじゃないんですか」

美咲は敬子への怒りをぶつけるように、力強く淫茎を扱きあげてきた。強く握り締められたことによつて、破裂しそうなほどに膨れあがった亀頭からは、止め処なく粘液が垂れ落ちていく。可憐な巫女の手淫に合わせて、又ヂュツ、グジョツと粘ついた音が一層大きくなる。

「うはッ、ああ、ダメ、美咲、姉ちゃん、僕」

「分かっているわよ。ねえ、正哉君。せめて私の胸、思いきり揉みしだいてちょうだい」
美咲の言葉に、悩ましい表情に愁うれいを滲ませた敬子は、正哉の右手越しに左乳房を荒々しくまさぐってきた。ブラジャーのごわつき越しにも、村長夫人の豊満な膨らみの感触がありありと伝えられ、再び射精衝動が盛りあがってくる。

「出そうなのね、正哉。ほら、早く出して。そうじゃないと、教えられないんだから」
さらに、ここへ来て年上巫女が手淫に変化を加えてきた。それまで頑なに手をのばすのを拒否していた亀頭に、左手の中指を這わせてきたのだ。ネッチョリとした先走

り液を漏らす鈴口を、スーッと撫でつけてくる。

「ぐあッ」

その瞬間、激しく腰が突きあがった。膝が震え、横に立っている敬子の二の腕を空いている左手で掴んでしまったほどだ。快感の高圧電流が一気に背筋を駆けのぼり、眼窩に鋭い火花を瞬かせる。

美咲に握られている肉竿は、巫女の細指を弾き飛ばそうとするように脈打ち、撫でられた鈴口からは粘度を増した先走り液が迸り出ていた。

「あら、美咲ちゃんの指で出ちゃいそうなの。もっと我慢してくれれば、それこそ私の家で、って思ってたのに」

「ほんとになに言ってるんですか、敬子さんは。これを小さくさせて、禪の締め方を教えないといけないのに。もう、正哉、いつまで粘るのよ。さっさと出しなさいよ」

自らの左胸を揉ませながら妖艶に囁く敬子に、美咲は目元を潤ませつつも当初の目的をしっかりと思い出させるようなことを言ってきた。

又ジュッ、クチュッと淫音を奏でながら右手で手淫をつづけ、左手の指先はパンパんに膨れあがった亀頭を優しく撫でつけてくる。

「うはッ、も、もう、ダメ。美咲姉ちゃん、僕、で、だ、出すよ」

膝がガクガクと震え、右手で村長夫人の左乳房をギュッと驚掴みにしてしまふ。二の腕を掴んでいた左手にも力が加わり、全身に痙攣が走りそうになる。

「いいわよ、正哉、出し、いえ、ダメ！　ちよ、ちよつと待つて、まだ、ダメよ」

叫ぶように言うのと、美咲は右手をペニスの根元に這わせ、万力で締めつけるように握りこんできた。迫りあがっていたマグマが、強制的に食い止められてしまふ。

「そ、そんな、ああ、美、サキ、ねえ、ちゃん」

解放の悦楽に浸ろうとしていた脳には、行き場のない興奮が充満し、グルグルと目が回るかのようにあつた。全身の毛穴がブワツと開き、イヤな汗が噴き出してくる。

「ティッシュ、ティッシュがないの。敬子さん、ティッシュ、持つてません」

美咲も相当焦っているのか、硬直の根元を凄い力で締めつけながら、辺りをキョロキョロと窺い、救いを求めるように村長夫人を見上げた。

「もちろん、持つてるけど」

「ティッシュなんか、どうでも、ぐふッ、いいじゃん、早く、出させて、よ」

「いま出されたら、装束が汚れちゃう。敬子さん、持つてるんなら、早くください」

美咲も相当に慌てているようだが、それ以上に正哉はもどかしさでいっぱいであった。村長夫人の豊富な乳房を揉みながら、初恋相手の手淫によつて射精するという、

夢のような現実が目前に迫っているのである。

汗だくになってゴールに駆けこもうとした寸前に、もう一周競技場を回ってこいと係員に強制的にゴールレーンから弾き飛ばされたランナーのような、やり場のない落胆に見舞われそうだ。

「み、美咲、ねえちゃん、は、早くうううッ」

トイレを我慢させられている子供のようになり、正哉は歯を食い縛り、腰をもじつかせながら、一刻も早い解放を求めている。

「待って。敬子さん、早く」

「ティッシュなんて必要ないわよ。正哉君、ちょっとごめんね」

敬子は嫣然とした微笑を浮かべると、正哉の右手を乳房から離させた。二の腕を掴んでいた左手も離せると、そのまま美咲の隣にしゃがみこんでいく。

「こうすればいいのよ」

言うが早いか、右手を正哉のペニスへのぼし、肉竿の中央付近を握りこんでくる。

「ぐがッ、くうう、そ、そんな、ほんとに僕、ぼくううう……」

根元を押さえこんでくる美咲のしなやかな指とは違う、いかにも男慣れした艶やかな指先が硬直に触れた瞬間、ゾワッとした震えが総身を駆け巡った。

「け、敬子さん？」

「うふっ、まだ、右手の力、緩めちゃダメよ」

美咲に言いつつ、敬子の指先が根元方向へとすべりおりてくる。その絶妙な力加減に、正哉は腰を切なげにくねらせた。一刻も早く射精させてもらえなければ、白目を剥き、泡を吹いて倒れてしまいそうだ。

やがて妖艶熟女の右手が、可憐巫女の右手のところまでおろされた。すると敬子は、止め処なく粘液を溢れ返らせる鈴口に向かって、目鼻立ちのはっきりとした悩ましい顔を近づけてきた。

「えっ、敬子さん、まさか」

美咲の表情が驚愕に彩られる。その間にも、肉厚の朱唇を開いた村長夫人の艶顔が、徐々に亀頭に接近していた。

「はふッ。ちゅっ、ジュチュッ、ぢゅむう」

「ぐかアッ、あつ、そんな、敬子さんの口に、ぼ、僕のが……」

それはあまりにショッキングな光景であった。破裂しそうに膨れあがり、赤黒くなっていた亀頭が、三十七歳の熟女の朱唇に咥えこまれているのだ。

自身の手以外に、初めて勃起ペニス握られた同じ日に、まさかフェラチオまで経



駭してしまうとは。それも、神聖であるべき神社内に建つ建物の中で。雪の降る中、土産神社に歩いてきたときには、想像もできないことであつた。

脳内で小さな爆発が何度も立てつづけに起こつた。だが、驚きに目を開いている美咲が、いまだペニスの根元を締めつけているため、射精することはできない。

眼窩は痛みを覚えるほどになり、世界そのものが歪んで見えている。自分が立っているのか横になっているのか、はたまた宙に浮いているのか、それすらも分からない。「んはあ、ちゅぶつ、はう、むちゆるつ……」

膨張しきっている亀頭が、敬子の舌によつて縦横無尽に撻なぶられていた。鈴口に尖らせた舌先を強めに当てられたかと思うと、張り出したカリ首の周囲を撫でられ、亀頭裏の窪みが掃き清められていく。

さらに舌は肉竿をも責め立ててきた。ニルツとした舌先がナメクジのように這いまわり、いきり立つ強張りが侵食されていく感覚が、快樂中枢を揺さぶってくる。

「あッ、ああ、おとおお……」

もはや、正哉には言葉を発する余裕もなくなつていた。意味をなさない、咆哮に似たうめきが断続的に溢れ出すばかりだ。膝が落ちそうになり、慌てて支えを得ようとのばした左手が、白衣に身を包む年上巫女の右肩を掴んだ。その行為で、美咲は我に

返ったようだ。驚いたように正哉の顔を見上げてきている。

(くほッ、美さき、姉ちゃん、手を、離して。お願い)

正哉は口を喘がせるだけで言葉を発することもままならず、切なそうに初恋相手を見つめ返すしかなかった。

「チュぷっ、ンああ……ピチュツ、ちゆる」

その間も敬子の舌先による愛撫はつづけられていた。妖艶熟女は、ペニスを握る手を右手から左手に変えると、自由になった右手で美咲の右手をトントンと叩いた。年上幼なじみの肩がビクツと震え、すぐ真横にいる村長夫人に顔を向けていく。

敬子は硬直を啜えこんだまま、美咲に右手を離すようジェスチャーで伝えている。とつとつに我慢の限界を超えていた正哉は、霞む視線でその様子を見つめていた。

(そうだよ、くはッ、美咲姉ちゃんが手を離してくれば、僕はすぐにでも)

敬子のジェスチャーに激しく同意をするように、正哉は額に脂汗を浮かべつつ、年上巫女に念を送った。同時に、思いを少しでも分かってもらおうと、なめらかな絹の白衣越しに肩を掴む手にも力がこもる。

「あッ、ご、ごめん」

美咲は自分が少年のペニスの根元をガッチリと握り締め、射精を阻害していたこと

にようやく思い至つたようだ。弾かれたように、硬直から右手を離す。

刹那、抑えに抑えられていた欲望の濁流が、一気に輸精管を駆けあがってきた。

「うおッ、で、出るうううッ」

雄叫びに似た絶叫が正哉の口から迸り出た。同時に鈴口が開き、縛めを解かれた白濁液が、激流となつて敬子の口腔内に溢れ返つていった。

ドピユツ、ビユルツ、どびゅびゅ、ドウケン、びゆるン……。

「ンぐっ！ むうっ、んう」

妖艶熟女の眉が苦しそうに歪む。それでも敬子は、決してペニスを解放しようとはしなかった。それどころか、小さく喉を鳴らして精液を飲みくだすと、射精の脈動をつづける肉竿を左手の指で上下にこすりあげ、今度は残滓を吸い取るような吸引を加えてきたのである。

「ぶちゅっ、ジュルツ、じゆるるるうっ」

「ダッ、め。そんな、ことされたら、ぼ、僕、もう……」

魂までも吸い出されるのではと思えるほどの強烈なバキュームと、頬を窄める敬子の妖艶なおんなの顔に、正哉の意識は飛んでしまいそうになっていた。

「ちゅぷっ、ジュツ、ぢゆるるううッ」

艶かしい敬子の吸引がつづく。それだけではない。まるで白濁液で汚れてしまった亀頭を清めるかのように、舌が縦横無尽の蠢きを見せていた。

「ほんとに、もう、ぼ、くッ」

頭の重さを支えられないかのように、上半身がグラグラと不安定に揺れ、膝から下が溶けてなくなったのかと思えるほどに、踏ん張りが利かなくなっている。美咲の肩を掴む左手からも力が抜けそうになっていた。

「えっ、ま、正哉？」

驚いたように見上げてきた年上巫女の可愛らしい顔も、靄もやの向こう側にいるように覚束ない感じにしか見えない。

「みっ、咲、ねえ、ちや、ン」

辛うじて発した声は、力なく消え入りそうな弱さがあった。

その声に弾かれたように、立ちあがってきた美咲の両手が、正哉の身体を支えようと両腕を掴んでくる。

「チュルッ、じゅ、チュウウウウッ……。チュポーン」

「うはッ」

最後に一層激しい吸引を見舞ってきた敬子が、肉厚の朱唇からペニスを解放した直

後、正哉は小さなうめきを発した。まるで、精気すべてを吸い出されたかのように、膝が折れ、美咲に支えられたまま、畳の上に崩れ落ちていく。

「ちよっと正哉、大丈夫」

「えっ、ああ、うん、もちろん」

「はあん、すっごい濃厚。私、ほんとにたまらなくなっちゃいそうだよ」

美咲の心配声に、恍惚の表情で頷いた正哉に、敬子が淫靡に濡れた瞳を向けてきた。村長夫人の唇はネッチョリと濡れ、妖しい光沢と饅すえた匂いを発しており、それだけでゾワッと背筋にさざなみが走り抜けていく。

「敬子さん、やりすぎです」

「あら、私が正哉君のザーメン飲んだから、怒ってるの？」

「違います！」

「ならいいじゃない。これで、禪の締め方も教えてあげられるわけだし」

美咲の言葉を軽くなした敬子の視線が、再び正哉の股間に向けられてきた。妖艶熟女の言葉を証明するように、そこにはかつて経験したことのない射精に度肝を抜かれたペニスニスが、通常時の大ききさでダランと頭を垂らしていたのであった。

正哉は天を衝く硬直の中ほどを握ると、差し出された巫女の右手にペニスを近づけていった。バトンの受け渡しをするように、美咲の手に肉竿が託されていく。

「うはッ、くう、ううう……」

幼なじみの手に、再び強張りが握られた瞬間、脳天には悦楽の火花が舞い散った。

「あんッ、すつごい、こんなベチョベチョにしてたなんて」

「美咲姉ちゃんのおそこだつて、グチョグチョに濡れてるんだから、お相子だよ。ぐはッ、そ、そんな強く、握ら、ないでええええッ」

正哉の言葉が痼に障ったのか、美咲がギュッと肉竿を握り潰すようにしてきた。とたんに目の前には色とりどりの火花が散っていく。

「な、生意気言ってるんじゃないわよ。せつかくあたしが、ここまでしてあげてるのに。このまま扱いて射精させちゃうわよ。この位置なら、ご神体にかかるだろうし」

普段はパッチリとしている瞳を悪戯っぽく細め、美咲が淫茎をこすりあげてきた。

「ごめつ、なさい。僕が、間違つて、ました。くふおッ、だから、美咲姉ちゃんの膣な中、挿れさせて、ください」

正哉にしても余裕などない状態なのだ。このまま扱かれては、本当に美咲を抱くことなく、ご神体に向かって射精をし終わってしまう。

どうせ最後は木製男根に精液をかけるにしても、やはり初恋相手の蜜壺に、ほんのわずかな時間でもペニスを埋没させたかった。

「分かっているでしょうけど、膣ひか中に出すのはダメだからね。最後はちゃんと、抜いててよ。それだけは、絶対に守って」

「分かっているよ。出すときはちゃんと、ご神体にかけるから、だからお願い、早く」美咲の確認に、正哉は何度も首肯を繰り返した。グツグツと煮えたぎったマグマが、睾丸を押しあげるように根元付近に上昇してきているのが分かる。早くしてくれないと、本当にこのまま射精することになってしまいそうだ。

「じゃあ、特別に許してあげる」

可憐な朱唇に悩ましい笑みを浮かべた美咲が、右手を淫裂へと引き寄せはじめた。すっかり潤っているながら、美咲の秘唇はわずかに口を開けている程度であった。その透明感溢れる蜜壺を見つめつつ、巫女の導きに合わせ、少しずつ腰を進めていく。

「くはッ、うほっ、ああ……」

クチュツと音を立て、亀頭先端が淫裂表面と接触した刹那、正哉の脳天に痺れるような喜びが襲いかかり、腰が切なそうにくねってしまった。

「あんッ、うん、はあ、も、もうちよつとよ」

艶かしくかすれた声をあげた美咲が、膣口を探るように握ったペニスを上下させ、亀頭の先端を淫裂にこすりつけてくる。

（僕のが、美咲姉ちゃんのおそこでこすられてる……。これだけでも、気持ちいい）

その生々しい女肉の感触だけで、射精感が一気に押し寄せてきてしまいたいそうさ。正哉は奥歯を噛み締め、尻穴を窄めることによって、必死に衝動を押し留めていた。

両手を純白の白衣の帯にのぼし、美咲のウエスト部分に載せていく。やがて、ンチユツという湿った蜜音とともに、亀頭の先端が膣口に少しだけ入りこんだ。

「はンツ、ここよ、正哉。そのまま腰を突き出してちょうだい」

「うん。いくよ、美咲姉ちゃん」

鼻にかかった甘い巫女の言葉に頷いた正哉は、美咲の括れたウエストを掴み、グイッと腰を突き出していった。ヌジュツとくぐもった音を残して、ペニスと蜜壺に入りこんでいく。

「くはッ、あつ、ぐあ、ああ……」

目を剥くほどの快感が全身を駆け巡り、目の前が白く塗りこめられそうになった。美咲の肉洞は信じられないほどの締めつけをもって、硬直を迎え入れてきたのである。

「うはッ、嘘、でしょう。ああん、こんなに、太い、なんて」

右手を再びご神体についた美咲が、背中を反らせた。同時にこぼれ出た悩ましいうめきが、裸電球一つが灯されただけの薄暗い洞穴に反響する。

正哉は美人巫女の喜悅の声を心地よく聞きながら、根元までペニスを押しこんでいった。括れていることが容易に想像できるウエストを、白い帯の上からさらにしっかりと掴み、しばし静止する。

（くほッ、くうう、敬子さんのとは全然違う。こ、こんなに人によつて感じが違うもんなんだ。それとも、美咲姉ちゃんが特別なのかな）

脱童貞を果たした村長夫人の淫壺は、ほどよい締めつけ具合で、硬直を優しく包みこんでくれる感じがしていた。それに対して、初恋相手の蜜壺は、ペニスが千切り取られてしまうのではないかと思えるほど、強烈な締めつけを加えてきている。

また柔褻の蠢き具合もまるで違っていた。敬子の褻が妖艶に絡みついてきたのに対し、美咲の膺褻は、挿入を果たした肉竿にピタリと貼りついてくるかのようだ。

敬子の肉洞が褻系の気持ちよさであるのに対し、美咲のそれは明らかに締めまり系の気持ちよさであった。

「ぐっ、おお、美咲姉ちゃんの中、すつごくキツキツで、気持ちいいよ」

「感謝、しなさいよね。ううん、こんなこと、してあげること、ないんだから」

木製男根に両手をついた状態で、美咲が振り返ってきた。その顔はそれまで見たことがないほどに艶つぼく、大きな瞳が悩ましく細められ、可憐な朱唇からは甘い吐息が断続的に漏れ出ている。

（まさか、可愛い美咲姉ちゃんが、こんなエッチな顔をするなんて……。うわッ、ダメだ、我慢がもう限界に近い）

「うん、もちろん感謝してるよ。だから、美咲姉ちゃんも、気持ちよくなってるね」

初めて見る年上巫女の悩ましい表情に、正哉は一気に高まってしまいそうな危険を覚えた。それでも感謝を行動で伝えるべく、ゆつくりと腰を前後に振りはじめた。クチュツ、ニュヂュツ、と粘ついた蜜音を立てながら、ペニスが淫裂を出入りする。

締まりの強い肉洞で硬直を抜きあげられ、それだけで射精感が急上昇してしまう。敬子の熟褻と比べ、蠢き度合いは小さいが、細かな柔褻が確実にペニスをこすりあげてきている。

「ああ、美咲姉ちゃん」

射精感の上昇に歩調を合わせるように、正哉の腰の動きがスピードをあげていく。グチュツ、ビジュツ、ぢゅぢゅつ、淫壺を攪拌かくはんする音が徐々に大きくなる。

「どう、美咲姉ちゃん、気持ちいい？ 僕のチンポ、気持ちいい」

沸騰したマグマが、出口を求めて陰囊内部を暴れまわっている感覚に耐えながら、正哉は必死に腰を前後させていった。熱くぬかるんだ美人巫女の蜜壺が、キュッキュツとペニスを締めあげてくる。

「ええ、くつ、うん、いいわ。はうん、太くて、熱くて、凄く硬いの」

「ほんと？　じゃあもつと、いっぱい、気持ちよくなつて」

正哉自身、余裕などまるでなかった。しかし、大好きな年上巫女が感じてくれているのが嬉しくてたまらず、つつい律動運動をさらに激しくしてしまう。

蜜壺を攪拌する音に混じって、パン、パンと正哉の腰が美咲のヒップにぶつかる音も洞穴内に反響しはじめていた。

「はう、ま、正哉、あんツ、ダメ、そんな激しく、されたら、こ、壊れ、ちやう」

ペニスを初恋相手の最奥に突き入れると同時に、正哉の下腹部全体が弾力ある美咲のヒップにぶち当たり、尻肉が弾むように波打つ。その視覚情報が、射精感をさらに助長させてきた。

「くおつ、ううう、はあ」

正哉の口からは、言葉にならないうめきがこぼれつづけた。断続的に這いあがる快感電流に、脳はピンクの靄を濃くし、眼窩では愉悅の花火がひっきりなしに打ちあげ

られていた。陰囊はキュンとなり、辜丸もろとも根元に向かって縮こまりはじめている。気を抜けば、その瞬間にも美咲の膣内で大噴火を起こしてしまいそうだ。

だが正哉は、もう少し耐えるつもりであった。奥菌を噛み締め、肛門を締めあげ、射精衝動の到来を先延ばししようと必死になる。

その一環として、巫女装束である白衣のウエスト部分に這わせていた両手を、胸元へとのぼしていった。正絹のなめらかな生地越しに、美咲の乳房に両手を被せていく。白衣と襦袢を通して、弾力ある膨らみの感触が伝えられてきた。

「あうん、正哉、胸はダメ」

「ヤダ、触る。いまは、美咲姉ちゃんの身体全部、僕のものなんだ」

絞り出すような声音で言うと、正哉は乳房の膨らみから襟の合わせ目に両手を移動させ、中の襦袢ごとグイッと強引に押し広げるようにしていった。

「キャッ」

美咲の驚きの声で、双乳露出が成功したと感じた正哉は、すかさず両手を瑞々みずみずしい膨らみに戻していった。腰の前後動に合わせて、プリン、ぷるんと円錐形の美乳も揺れているのが、這わせた手の平に伝えられてくる。

「美咲姉ちゃんの生オッパイ、やつぱり大きい」

両手を木製男根につき、ヒップを後ろに突き出す格好をしていることもあるのだから、重力に引かれた美咲の乳房は手の平にあまる大きさであった。弾力豊かな膨らみを、正哉は捏ねるようにして揉みこんでいく。

「はうん、あん、正哉、まだなの。は、早く、イッて」

「くふっ、くうう、もうちよつと……」

乳房を揉むと肉洞も敏感な反応を見せ、キュツ、キュツと締めつけをさらに強めてきた。目前に迫りくる射精感を必死に押し留めつつ、正哉は腰の律動と乳揉みをつづけていった。

腰を振るごとに、ヌヂユツ、グチョツとくぐもつた淫音が大きくなり、それに比例してペニスを襲う痙攣間隔が短くなつていく。ぴっちりとは貼りついてくる細かな膣壁に扱きあげられつづけている硬直は、もう限界に近い状態だ。

（くほッ、ほんとに、もう、出ちやい、そうだ）

それでも、腰の動きを止めることはできなかった。ズチョツ、ぬぢゆつ、ビジュツ、あえて限界を早めるような律動が間断なくつづけられていく。

「あうん、正哉、まさつ、やあんッ、いい。くふうンッ、ああ、素敵よ、正哉」

艶かしい美咲の喘ぎに、正哉は乳房を捏ねる両手に変化を加えることで応えた。張

りのある乳肉全体を揉むのではなく、親指と人差し指で乳首を摘んだのだ。小粒ながらも充血した突起の、コリッとした感触が指の腹に感じられる。

「あうっ、あんっ、だ、ダメ、そんな、ところまで、弄ら、ないで」

「くほっ、また締めつけが強くて……。美咲姉ちゃんの乳首、勃たつてるよ。ほら、こうやると、気持ちいい？」

乳首を触ったことにより、肉洞はさらに狭くなったようだ。まるで万力で締められているかのような圧迫をペニスに感じ、正哉は白目を剥きそうになった。それでも、美人巫女の勃起乳首を、紙こ繕よりを織るようにクニクニと揉みこんでいく。

「はうん、ほんとに、ラめ、なの、そんなことされたら、あだし、イッチャう」

イヤイヤをするように美咲が首を左右に振った。サラサラのショートボブの黒髪が、ふんわりと空気をまとって揺れている。

霞みそうな視界に、それを眺めながらも正哉の腰は休むことなく動きつづけていた。グジュッ、ぬちゅっ、ヂュチョ……。激しく腰を前後させるごとにペニスをキツキツの蜜壺で締めあげられ、睾丸がわなないていく。

（イかせたい！ 美咲姉ちゃんを、僕が、イかせてやるんだ）

美咲の言葉に新たな目標を定めた正哉は、気力を振り絞りつつ最後のスパートにか



かった。抑えつけられていた射精感が、一気に迫りあがってくる。

「ああ、美咲姉ちゃん、ぼ、僕、もう……」

「出そうなのね。でも膣中はダメよ、約束は、はうん、守って」

「分かってる。美咲姉ちゃんの膣中に出したいけど、くっ、我慢して、ちゃんとご神体にかけるよ。あッ、くっ、おお、もう、ほんとに出そうだ」

正哉は乳首弄りをしていた両手で再び円錐形の膨らみを驚掴みにすると、歯を食い縛りつつ、叩きつけるような律動を数回繰り返した。

「ダメ、あ、あたしもイッチャう。正哉、あたし、あたし、イックウウッ！」
美咲の全身に痙攣が襲いかかり、甲高い絶頂音が洞穴内に響き渡った。直後、硬直を肉洞から引き抜いていった。

引き抜く際の抜きあげが、最後のトリガーを引いた。亀頭の先端が淫裂から離れた瞬間、全身に絶頂の痙攣が襲いかかってきたのだ。

「うッ、出る、出るうううッ！」

正哉は後ろからピッタリと美咲に身体を重ね合わせるようにして、絶頂の雄叫びをあげた。ビクンッと肉竿全体が大きく跳ねあがり、亀頭がさらなる膨張を見せる。直後、沸騰したマグマが輸精管を一気に駆けあがってきた。

びゅくん、ドピュツ、ドクツ、どうびゅびゅ……。

年上巫女の股間に突き出されたペニスから、白濁液が迸り出ていく。吐き出された精液は、ピチャツ、ピチュツと水っぽい音を立て、間違いなくご神体である木製男根に降り注いでいった。

「うはッ、ああ、はあ、うはあ……」

「はあん、よくやったわ、正哉。はあ、ああ……ううん、これで、豊年の儀」は無事終了よ。ご苦労さま」

荒い呼吸を繰り返す正哉に、後ろを振り返ってきた美咲が、嫣然とした微笑を浮かべ儀式の終了を宣言してきた。その顔は恍惚感にまみれ、巫女の清廉さとは真逆な凄艶さに縁取られていた。

正哉は淫らすぎる巫女の顔に恍惚とした顔を近づけていった。艶やかな微笑を浮かべたまま、美咲が頷いてくれる。

「美咲姉ちゃん、ありがとう。大好きだよ」

正哉は陶然と呟きつつ、悩ましい吐息を漏らす可憐な朱唇に、唇を重ね合わせていくのであった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!